

稲刈り仁王



むかし、むかし柿崎の川井というところに、能登屋という家がありました。

ここの主人は、とても信心深い人で、毎月8日に、かかさずの清水観音にお参りして、ろうそくやお花をあげたり、お堂の内から外まで、きれいにおそうじしていました。

その年は、大そう天候もよく、近年にない豊作になりました。能登屋の主人も「去年の2倍はとれるだろう。これも観音様のおかげだ。」と、とても喜んでいました。

しかし、稲刈り近くになって、能登屋では、おかみさんとむすこ夫婦が熱病にかかってしまいました。三人も寝込んでしまい、主人は困り果てていました。

そんなある朝、まだ暗いうちに仁王二人がやって稲刈りを始めました。仁王たちは、「おれたちは木像だから、食事はいらん。」と言って、ご飯も食べずに、三日三晩で稲刈りをすませました。能登屋の主人は、お礼にたくさんのお米を渡しました。



仁王たちは、お礼に渡された米を担いで帰ったのですが、途中で貧しい家々に配ったため観音様に渡す分がなくなってしまいました。観音様におそるおそる事の次第を話すと、観音様は、怒るどころか、にこにこして、「お前たちは本当によいことをした。」と、仁王たちを大層ほめたと言われています。